

内湾にすむタカハシホタテ

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



(「日本の地形2北海道」より、改変)

(上)約500万～300万年前の北海道で海となつたところ(□)。



(「地図研専報22十勝平野」より、改変)

(右)約500万年前の十勝。今の陸別町まで、内湾が入りこんでいた。浅くて、湿原となるところもあった。



砂底の中

(上)タカハシホタテは厚く曲がった方のカラを砂底にうめていた。



カシパンウニの化石。

(写真:2枚とも、十勝の自然史研究会)

タカハシホタテがすんでいた

この内湾には、タカハシホタテという貝がすんでいました。このタカハシホタテは、子どものころは、ふつうのホタテガイのようにうすいカラを持って水中を泳ぎます。それが成長の中期(7cmくらい)になると、片方の貝ガラ(右殻)が大きくて厚くなり、湾曲するようになります。

こうなると泳ぐことはできず、ふくらんだ方を海底の砂にうめ、産卵に専念していたようです。敵からにげることができないので、厚いカラで身を守ったのでしょう。

そのほか、ナカジマキララガイ、ホタテガイ、エゾイシカゲガイ、ダイオウシラトリガイなどの貝や、カシパンウニ、あるいは有孔虫(p34 写真)という直径1～2mmのカラを持つ単細胞動物もすんでいました。

(貝の種類は「十勝大百科事典」より)

海じゃなくなるところも

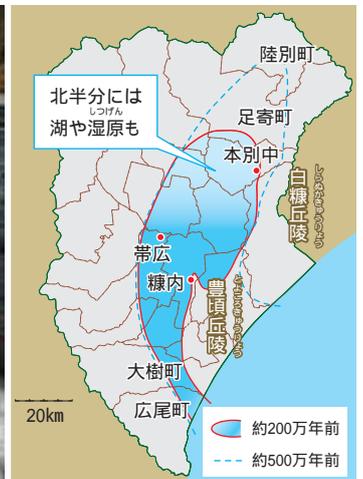
およそ300万年前になると、内湾の北半分では、塩分がうすくなったり、淡水の湖ができて湿原が広がったりすることもありました。また、豊頃丘陵が上昇し、南部の海はせまくなりました。

十勝の北では火山活動が活発になりました。火山からは、火山灰がふき出して周りに降り積もります。また、火砕流が流れ出して海や湖に流れこみ、今の幕別町の猿別川ぞいにも厚くたまりました(稲士別タフ・猿別タフ)(p39)。

本別中学校近くの美里別川では、およそ300万年前の湿原のあとである亜炭の地層と、火砕流の地層が見られます。(火砕流 p36、亜炭 p41)



黒いところが約300万年前の湿原の植物からできた亜炭。本別中近くの美里別川。



約200万年前の十勝。海がせまくなつている。(「地図研専報22十勝平野」より、改変)

1 淡水(たんすい):塩分をふくまない、川や湖などの水のこと。
2 火砕流(かさいりゅう):火山が爆発してふき出したマグマがくだけ、高温ガスと一体になって火山の斜面(しゃめん)を、地球の重力を駆動力(くどうりょく)にして、高速で

流れ下ること。噴煙(ふんえん)として立ち上つたあと、くずれ落ちる場合もある。
3 タフ(tuff:英語):火山から噴出(ふんしゅつ)された火山灰が地上や水中にたまり積もつてできた岩石のこと。凝灰岩(ぎょうかいがん)。

ここが海の底だったの？ ... 本別公園、本別川ぞいの岩のがけ

本別町を流れる本別川。この川ぞいの本別公園には、切り立ったがけが続いています。

このがけの岩は、およそ500万～400万年前の内湾の底にたまった、砂や石からできた地層です。

海の底にたまった砂や石は、上にたまったものの重さや化学的作用・バクテリアの作用などによって、ゆっくり固められていきます。パラバラだった砂や石が、一つの岩石になっていったのです。

このように、水の底にたまったものでできた岩石を「堆積岩」といいます（陸上でできる堆積岩もあります）。本別公園近くのガケの岩は、「砂岩」や「れき岩」などの堆積岩からなる地層なのです。

この地層からは、500万～400万年前ころに生きていた、ナカジマキララガイやタカハシホタテ、ダイオウシラトリガイといった今では絶滅した貝や、ホタテガイのように今でも生きている貝の化石が見つかっています。



本別公園などの位置。本別町東町、ガケのある山は朝日町に入る。



本別川ぞいにあるがけ（本別町）。堆積岩の地層がシマモようになって見える（白矢印）。土で見えないところも多くが堆積岩。



砂つぶが集まってできた砂岩。



小石が集まってできたれき岩。

マグマからできた「十勝石」... 十勝三股の黒曜石



糠平湖に注ぐタウシュベツ川（上士幌町字幌加）で見つかった黒曜石。



タウシュベツ川で黒曜石を探す。（帯広百年記念館「地質講座」）



十勝北部の然別湖周辺（鹿追町）から糠平や十勝三股周辺（上士幌町）は、静かな山あいの観光地ですが、実は火山の集まりです。今でも、糠平の北西にある丸山からは、ガスがふき出しています。

およそ200万年前（黒曜石の年代から推定）には、はげしい火山活動が起きていました。ある時、十勝三股周辺で、地下深くから水分の多いマグマがふき出てきました。このマグマは、急に冷やされました。

マグマは、ゆっくり冷えると何種類かの鉱物が大きな結晶となり、しっかりとした岩石になります。しかし、水分が多い場合など、急に冷えると結晶ができずに固まるため、ガラスのような固まり（火山ガラス）になります。これが「黒曜石（十勝石）」です。

この黒曜石は、旧石器時代（p72）、縄文時代（p84）、続縄文時代（p100）に、石器の材料としてさかんに使われます。今でも、かざり用の石細工の材料となっています（p160）。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん